

社会が求める大学教育とは？

～ 体験と実践が学生を変える ～

大和総研 調査本部 副部長（社会連携担当）

宇野 健司

目次

<論点1> なぜ日本の大学生は勉強しないのか？

～ 学業への「モチベーション」が問題 ～

<論点2> 「社会が求める大学教育」とは？

～ 「考える」「話す」「行動する」 ～

<まとめ> 学生のモチベーションを高めよう！

～ 「大学」「企業」「文科省」の連携が必要 ～

<論点1> なぜ日本の大学生は勉強しないのか？①

- 外国人留学生からの侮辱：

「日本の大学生は、何で勉強しないの？」

「成績が悪くても、卒業できるね」

「日本の大卒は、海外の短大卒以下」

- 本を読んでいない（400冊 vs 100冊）

- 「リーディングアサインメント」（授業前の必読資料）

- 授業に出なくても、単位がもらえることがある

<論点1> なぜ日本の大学生は勉強しないのか？②

A 外発的なモチベーションの問題

(1) 成績が良くても誰からも評価されない (備考1)

→ 「大学」は、頑張った学生を明確に表彰すべき

(2) 成績が悪くても就活には関係ない

→ 「企業」は、採用基準の1つとして成績を評価すべき

(3) あまり勉強しなくても卒業できる (備考2)

→ 「文科省」は、勉強しないと進級・卒業できない仕組みを提示すべき

<論点1> なぜ日本の大学生は勉強しないのか？③

B 内発的なモチベーションの問題

(1) 授業が一方通行の講義形式で退屈

→ 「大学」は、ディスカッションやグループワークなど
学生参加形式の授業を増やすべき

(2) 授業が実社会につながらない

→ 「企業」は、インターンや実務家教員を積極的に提供するべき

(3) そもそも「何のために学ぶのか？」の意識が薄い

→ 「文科省」は、「人生・キャリア・勉強する意味」を考えさせる
キャリア教育の初年次からの導入策を検討するべき（備考3）

備考1: ラテン・オナーズによる表彰制度

- **スンマ・クム・ラウデ** (summa cum laude) - 最優等の意。成績**上位5%**程度。
- **マグナ・クム・ラウデ** (magna cum laude) - 最優等と優等の中間。成績**上位10%**程度。
- **クム・ラウデ** (cum laude) - 優等の意。成績**上位15%**程度。

(例えば、ラテン・オナーズを受賞した皇太子妃雅子殿下の場合、学位は**B.A. in Economics, magna cum laude**)

備考2: 「プロベーション」制度

- GPAが悪かった学生（例えば、2.0以下）には、成績回復のための猶予期間「プロベーション」が課される。
- もし次の学期に成績が回復しなかった場合、基本的には退学になる。
- つまり、単位が取れただけではダメで、**成績が悪い学生は、卒業できない仕組み**になっている。（質の保証）

備考3: アメリカの大学は、入試で「エッセー」を課す

- 「なぜ大学で学びたいのか?」「何を学びたいのか?」「将来どのような人生・キャリアを歩みたいのか?」などをエッセーとして、大学入試で課す（合否に影響大）
- 日本は、大学3年ごろの就活で、同じことを考える。
⇒ **アメリカ(高校3年)** vs **日本(大学3年)**で、3年遅い
- 「幼い」「協調性はあるが、主体性に乏しく受け身」と、企業は不満。⇒大学初年次からの「キャリア教育」が必要。
⇒就活テクニックでなく、**人生・キャリア・学ぶ意味**を考える

<論点2> 「社会が求める大学教育」とは？①

- 「即戦力」の**誤解**：
「企業が求めているのは、付け焼き刃の浅い専門知識？」
「そのようなスキルは、すぐに役に立たなくなる？」
「すぐには役に立たない学問こそ、学ぶ価値がある？」
- 「何を求めているのか？」を具体的に**伝えて来なかった**
- 「学問の場」 VS 「社会に出る準備」 ⇒ **バランス**の問題
- 「学究の時間」 VS 「自由な時間」 ⇒ **メリハリ**の問題

<論点2> 「社会が求める大学教育」とは？②

A 「何を学ぶか」（知識）よりも、「どう学ぶか」（主体性）

• 「リベラルアーツ（教養教育）」の誤解（備考4）

①教養科目は、題材として「思考力の訓練」に適している

②「少人数ディスカッション」で堂々と意見を発言し合う

③研究志向というより、「教育志向の教員」が指導する

• ①ばかりが強調されるが、②③が大事（昔の「一般教養」の反省）

⇒「知識を得る」& 自分で「考える」「話す」「行動する」

• つまり「どう学ぶか」（主体性）が重要

⇒「知的思考力」をベースに、「他人に伝える力」「集団で解決策を話し合う力」を鍛えるトレーニングを教員指導の下で積むこと！

備考4： アメリカのリベラルアーツ教育の事例

「総合大学」 VS 「リベラルアーツカレッジ」

⇒前者は、大教室と少人数TAセッションの週2回授業が多い
(サンデル教授の哲学の全学科目→学生1000名、TA50名)

⇒後者は、ほぼ全科目がゼミのような10～20人の少人数授業

※いずれの場合も、1学期で4～5教科の履修が一般的
→1教科につき、週2回授業
→教科書：1冊、副読本：数冊 を1学期でこなす
(授業前に、指定ページを読了していることが義務)

⇒大量読書&ディスカッション&レポート提出で学生を鍛える教育

備考5： アメリカのTA制度は、うまく出来ている

- ①TA採用時の成績重視が、**学業へのインセンティブ**となる
- ②将来の教員のための**教育体験**として有効
- ③**アルバイト収入**の確保（地方にあるので、機会が少ない）
- ④TAによる**教員の負担軽減**
 - 余談：入試業務も、教員でなく職員に任せるのが常識
 - 大学職員のプロ化・専門職化・高度化
（日本も、アカデミック・アドミニストレーターとして
職員の専門能力・地位・社会的評価の向上が必要）

<論点2> 「社会が求める大学教育」とは？③

B ①専門知識だけでは不十分。

⇒②議論⇒③フットワーク⇒④プレゼン⇒⑤レポート作成

- ①まずは、大量に関連資料を読み込み、「専門知識」をインプット
- ②チームで「議論」して、テーマ、課題、論点などを浮き彫りにする
- ③「フットワーク」を使って、専門家などに意見を聞いてまわる
- ④みんなの意見を集約して、人前で堂々とした「プレゼン」を行う
- ⑤その内容をしっかりとした文章にまとめ、「レポート作成」を行う

※この①～⑤のトレーニングが積めるなら、専門分野は何でも良い。

会社で事業の立案を任されても、同じプロセス＝社会が求める教育

<まとめ> 学生のモチベーションを高めよう！①

A 外発的なモチベーション（学業成績）の問題

「大学」⇒頑張った学生を明確に表彰すべき

「企業」⇒採用基準の1つとして成績を評価すべき

「文科省」⇒勉強しないと進級・卒業できない仕組みを
提示すべき

B 内発的なモチベーション（やる気）の問題

「大学」⇒ディスカッションやグループワークなど
学生参加形式の授業を増やすべき

「企業」⇒インターンや実務家教員を積極的に提供するべき

「文科省」⇒「人生・キャリア・勉強する意味」を考えさせる
キャリア教育の初年次からの導入策を検討するべき

<まとめ> 学生のモチベーションを高めよう！②

- 東京大学、東北大学、上智大学などの授業や、年間300人の就活相談に乗り、学生と間近に接して来た経験などから、「モチベーションの問題（学業成績&やる気）」が、大学教育改革の本丸であると実感する。
- 問題の本質= 「大学教育から実社会への橋渡し」に関する「産学官の連携不足・努力不足」
- 対策= 「大学」「企業」「文科省」で連携して、前述の当たり前前のことを、当たり前前やること。

略歴 : 大和総研 調査本部 副部長 宇野健司

1985年 早稲田大学 卒業

1992年 ニューヨーク市立大学 大学院 (MBA) 修了

1996年 証券アナリストジャーナル賞 受賞

2004年より、大学での連携講座（無償）を提供。

東京大学、東北大学、上智大学などで非常勤講師。

※学生主導の少人数ディスカッション授業（30名程度）
（2019年度からは、北海道大学、立教大学も追加予定）

問い合わせ先: kenji.uno@dir.co.jp 03-5555-7207 (直通)